

## 「メロドラム」小論(二)

——大革命とロマン派をつなぐ文学の一面——

片 山 正 樹

- I 序 説
- II 大革命直後の社会と文学
- III メロドラムの誕生と流行
- IV メロドラムの起源
- V ギルベール・ド・ピクセレクール〔本号掲載〕
- VI メロドラムの代表作「セリーナ」
- VII メロドラムの技法と観客
- VIII メロドラムの影響
- IX 結 論
- (付) 用語「メロドラム」とその実態との歴史的変遷

### V ギルベール・ド・ピクセレクール

メロドラムの古典ともいうべき作品「セリーナ」を論じるに先立ち、まずその作者の生涯に触れねばならない。<sup>47</sup>な

ぜなら、ピクセレクール（一七七三—一八四四）の一生は、まさにメロドラマチックなものであり、それが彼の作風に反映したと考えられるからである。以下、彼の前半生、すなわちメロドラマ作家となるまでを中心に、彼の実生活を簡単に考察したい。

ルネ・シャルル・ギルベール・ド・ピクセレクール（René-Charles Guilbert de Pixérécourt）はナンシーの貴族の家に生れた。一七七三年一月二日に始まる彼の一生は、不幸と幸福、失敗と成功が、あざなえる縄のごとくに転換し、いわゆる波瀾万丈のものであった。その信じがたいほどのスリルに満ちた実生活が、メロドラマ作家としての彼に、根本的な創作理念を与えたことは疑いない。そして、悲運や逆境を鉄の意志と不断の勇気で切り抜けるとき、彼の寄りどころは《ただ一語、神！》であったという。<sup>48</sup> 事実、彼の信仰は非常に篤いもので、彼の性格の特色となっている。しかし、絶望の極みに彼を救助するのは、宗教的な〈神〉であるより、むしろ〈器械仕掛けの神〉<sup>デウス・エックス・マキナ</sup>であり、メロドラマ作家に意外な新局面ばかりを与える運命の皮肉さは無類のものである。

彼の父、ニコラ・シャルル・ジョルジュ・ギルベールは《旧制<sup>アンシャン・レジーム</sup>度にぴったりの父親で、息子どのを抱擁するよりは殴打しようと構えている》<sup>49</sup> 人物であった。この父親の異常な厳しさは、ピクセクルの性格に、大きく作用したらしい。母親のことは、優しく慈悲深い婦人であったというもののほか、ほとんど明らかでない。彼の回想によれば生後三ヶ月にして、意地悪な乳母のため、あやうく死ぬばかりであったところを、善良な農婦の世話によって命び<sup>50</sup>ろいをしたとのことである。彼は四年間いなかで暮し、八才のときナンシーに連れ戻されて学校へ通うことになった。わんぱくな彼は、授業中にパン屑をまるめた玉を先生に投げつけたことで厳しく罰せられ、父親に報告される。父親は彼を監獄に入れるとおどかし、非常識にも、それを実行しようとする。自殺をくわだてるほど悲しんだピクセクルは、老導師ミュニエ神父のとりなしを得て、危機をのがれることができた。そして一七八五年、病身をおして優

等生代表となつた彼が、賞品の書物三十巻を家僕にかつがせて帰り、父の目前に得意満面で積み上げたところ、《よし、あなたは義務を果たした》という冷やかな声が聞えただけであつた。この父は、決して息子に親しい呼び掛けを用いなかった。

彼は、弁護士になるつもりで、ナンシー大学で法律を学んだ。父親は、侯爵の称号を得る目的で、ピクセレクール莊園を売り、サン・ヴァリエ(Saint-Valier)の土地を買った。しかし、一七八九年八月、国民議會は、あらゆる封建的権利の廃止を宣言したので、時期おくれの侯爵は、新しい土地も財産も一挙に失うことになった。一家に襲いかかる革命の嵐がそれだけに終るはずもなく、一七九一年六月には、ピクセレクールは、父親の命ずるまま、フランスを離れることとなり、《流謫の貴公子たち》のつどうコブレンツへ向つたのである。

のちに彼の劇作に役立つたドイツ語を彼が身につけたのは、この時期であつた。ドイツにおける彼の生活を、ジュール・ジャンが、多少のからかいを交えて描写しているが、それによると、十八才のピクセレールの初恋は次のようなものであつた。ここにも、未来のメロドラマ作家がまつたくの空想から創作していたものではない事情がうかがわれる。すなわち、革命がどう推移しようと、社会がいかに変化しようと、青春そのものは万古不易のもので、ピクセレクール家の若様、サン・ヴァリエ侯爵の御曹子は、憧れの女性を異国に見いだしたのである。しかし、天性の趣味か、将来への予感か、彼の恋の状況設定と舞台装置は、メロドラマそのものであり、さらに彼を訪れる運命までも、意外性に満ちたものであつた。モーゼル河の左岸、《ほの暗い森の中》に尼僧院があり、尼僧の長は《由緒あるドイツ貴族の出》の元男爵夫人である。その姪にクロチルドという美少女があり、彼女は《孤児で、莫大な遺産を継承》している。ピクセレクールはクロチルドと知り合い、やがて二人は恋ごころを抱くようになる。伯母の迫害こそないが、少女は《柳の木陰にすわり》、胸の思いを書きしるした紙片を、僧院を流れる《小川のせせらぎ》に托すの

であった。やがてコンデ大公がエブレンツに反革命軍を組織し、それに従わねばならないピクセクルは、恋人に再会を約束して出陣する。やがて彼が尼僧院に戻ってきたとき、すでに院長は「八十才で大住生」しており、クロチルドも「へい」といふ亡命の若者「を待ちわびつつ、十六才の秋を最後に「胸のやまいで」はかなくなっていた。《わたしの落胆は、その五十年たっても消え去らない》とピクセクルは述懐する。

恋人の死後まもなく、彼はフランスに潜入するが、当然のこと憲兵隊に追跡される。探索の手は厳しくて、あるときなど彼は、捕吏の急追をのがれるため、下水溝の水中に腹ばいになってかくれたほどである。追手は彼のそばを歩き来し、見つからないのをいぶかしんだ。《運のいいやつだ、あやういところを助かりやがった。》と話す憲兵の声が聞こえた、とピクセクルは伝えている。<sup>52</sup>

彼は一七九三年ナンシーに戻り、パリへ移って、ミシエルという友人とともに、ある屋根裏部屋に住みついた。見つかれば処刑されるおそれがあり、危機はいくども訪れた。生計費にもとぼしい青年は、貧困と断頭台とに常におびやかされていた。しかし意志強固なピクセクルは、ギルベールの仮名のもとに、ひそかにパリ生活を続けたのである。<sup>53</sup>

その頃の彼の回想によると、この苦しかった時期に、彼はヤングの「夜」を愛読していた。憂愁と死の思いを歌ったこの長詩は、彼のおかれた状況に適すぎていたのである。気晴らしとしては、メルシエの戯曲などを読んでいた。ある日、友人のミシエルが彼にフロリアンの「中篇集」(Florian: Nouvelles)を貸した。それを読んだとき、いわば彼の一生が決定された。彼は劇作家としての天職を意識し、いちばん気に入った物語「セリコ」を材料に劇を書くことを思いついた。一週間のちに仕上がった「セリコ、または寛大な黒人 (Séico ou des Nègres généreux)」の脚本は、やがて一括して金に変えることができた。<sup>54</sup>この成功に力をえた彼は、再びフロリアンの作品から、「クロード・イヌ、

または有徳のイギリス人 (*Claudine ou l'Anglais vertueux*)」と題する一幕オペラを二日たらずで完成した。これも一週間のちに売れ、調子づいたピクセクルは、「アレクシス、または森の小さな家 (*Alexis ou la Maisonnée dans les Bois*)」という三幕喜劇、さらに「ジャックとシヨルジュット (*Jacques et Georgette*)」という二幕喜劇その他を書き上げる。新進劇作家としての道が開けそうになった矢先、国民公会が、十八才から二十五才の未婚男子の徴兵を布告したので、彼はナンシーへ帰らねばならなかった。手続きを終えて、第十一騎兵連隊に入隊した彼は、正義観から、故郷で事件を引き起すのである。ナンシーには、マラーモージェという名の、国民公会の代表者がいた。この男は非道無残な怪物で、かすかずの悪事を働く。この役人が、父親の命乞いに來た若い娘を犯したあげく毒殺したとき、被害者を知っていたピクセクルはじっとしておれなかった。最初は悪者を殺そうと考えたが、思い直した彼は、より安全でより効果的な復讐を計画した。彼は、「マラーモージェ、または派遣されたジャコバン党员 (*Murderer ou le Jacobin en mission*)」と題する一幕物を書いたのである。彼はナンシー劇場でそれを上演しようとしたが、検閲を通過するはずはない。彼を逮捕する命令が出たのも当然であった。憲兵たちが彼の家を襲った夜、前日に隊長から賜暇を得ておいた彼は、かねて用意の逃げ道から脱走する。その許可書は、病弱のため勤務不能につき、本人が最適と考える土地に転地療養を認めるという内容のものであった！ここにも、ピクセクルが体験した、メロドラマチックな実生活の一端がうかがわれる。悪人、乙女、暴行、毒殺、復讐、逮捕、憲兵、逃走の一幕。彼の活動が少々非常識なものであったことや、逃亡に際して周到な準備をしていたことも、彼のロマネスクな性格を示している。

彼は再びパリに出たが、到着早々、国民公会の政令<sup>55</sup>が発表され、旧貴族はパリを追放されることとなった。ピクセクルもナンシーの監獄に送られるというのである。これに従うことは死を意味する。彼は冷静に状況を判断し、

行動に移らねばならなかった。彼は公安委員バレルを訪問し、至極卒直に、まだ死ぬには早いこと、なにができるかわからぬが、劇に一身を捧げたいことを語り、自由を請願した。彼の素直さを買ったバレルは、同志カルノー將軍に彼を紹介した。結局、ピクセクールはパリにとどまるようになったうえ、書記官の職も手に入れたのであった。ピクセクールのパリ暮らしが無事に続くかに見えたのも束の間、ある朝、チュイルリー宮殿に向う途上で、ナンシーの革命委員会のメンバー二人にでくわしたのである。彼の最大の敵であったこの委員たちは、その足で、彼をロベスピエールに直訴する。今回、彼の命を救ったのはカルノーであったが、それは決して簡単なことではなかった。カルノーに対し、終生ピクセクールは感謝と愛情を抱いている。一七九五年に、彼は昇進するが、<sup>56</sup>執政官政府の成立とともに職を辞した。自由の身で演劇に専念する決意をかためたのである。

彼は一七九五年、二十二才の秋にパリで結婚した。<sup>57</sup>彼は自分の結婚について、《早すぎた結婚の最初の三年間、私はまったく不幸だった。幸運を夢みたかずかずの希望はすべて消え失せ、地所も、地位も、金も、パンもなし！そのくせ、妻と乳のみ子を守って行かねばならなかった》<sup>58</sup>と書き残している。彼が妻について語ろうとしないことは、プラトニックな初恋の少女クロチルドのことを克明に記しているのにくらべて、奇異の感を受けるが、要するに彼の妻は彼の生涯と仕事に関して大きな役割を果たさなかったものであろう。<sup>59</sup>

地位も金もないピクセクールは、貧困と戦わねばならなかった。彼は脚本を十六篇も書き、パリのいろんな劇場に持ち込んだが、彼の苦心もむなしく、常ににかの障害が起って、一本も上演されるものはなかった。しかし彼は絶望せず、当座の暮しは、安売りの扇子に彩色することでのいであつた。彼には並はずれた画才があつたが、その才能は、のちに劇作家として、舞台装置や衣裳を適確に指示することに役立つまでに、暮しの足しになったのである。一年半ものあいだ、彼はこの仕事を継続した。やがて彼の努力の報いられる日が到来した。一七九七年九月十六日に、

〈ランビギュ〉座において、ついに彼の作品が上演される。この一幕喜劇「しがない田舎者(*Les Petits Amoureux*)」は七十二回も上演されるほど成功し、彼は扇子に画をかくことから解放されたし、また、いくつかの芝居小屋がこぞって彼の作品を上演するようになった。このときから、全作品の上演回数がのべ三万回と称される、<sup>60</sup>流行劇作家ピクセレクトールの活躍が開始されるのである。

メロドラマの代表作「セリーナ、または秘密の子」より二年早く上演された「ヴィクトール、または森の子(*Victor ou l'Enfant de la Forêt*)」(一七九八年六月十日)の成功は、<sup>61</sup>劇作家ピクセレクトールを勇気づけるものであった。彼はこの作品を〈抒情劇(*drame lyrique*)〉と呼んでいるので、「ヴィクトール」初演をメロドラマの誕生と呼びにくい、やはり、これはやがて彼がメロドラマと呼ぶ形式のものであり、「セリーナ」と並ぶ傑作である。この二作品はいずれも、さきに触れた、当時の流行作家デュクレ・デュミニの同名の大衆小説の劇化であった。すでに評判をえた筋書きを利用したのは、ピクセレクトールに、時流に乗る才と脚色の腕があったゆえであろう。しかし、彼が、無意識のうちにも、あらゆる時代と国籍をこえて通用する〈メロドラマ作家〉の基本的姿勢を呈示したことは、〈メロドラマの父〉という彼への呼称に、二重の意味を与えるものと考えられる。なぜなら、彼は、メロドラマという〈ジャンル〉を生みだした一方、その種の〈作家〉の先祖でもあったとみられるからである。

一八〇〇年に上演された「セリーナ」は、ピクセレクトールの劇作家としての地位を不動のものとした。彼の名声は爆発的に高まり、さきにも述べたように、「セリーナ」はパリで三百八十七回、地方で千九百八十九回<sup>62</sup>も上演され、さらに、英語訳、ドイツ語訳、オランダ語訳がヨーロッパ中に拡がったのである。幸運にめぐまれた彼の進路は定まり、あとは豊かな筆にまかせて、次々とメロドラマを発表すればよかった。百二十篇にのぼる彼の劇作のうち、五十九篇がメロドラマに分類されている。<sup>63</sup>



こうして三十年間、彼は大衆演劇の王者であり、年収は二万五千フランを越えるものであったという。彼は劇界の大物となり、要職に付き、ついに一八二五年から一八三五年までハラ・ゲテV座の支配人となった。彼の作品のうち秀作が次々と上演されたのは、この劇場であった。十年間にわたる好調は、まだまだ続くはずであったのに、またもや運命のいたずらが彼を襲うこととなる。一八三五年二月二日、大火事のためハラ・ゲテV座が壊滅したのである。この突然の悲劇のため、彼は財産のほとんどを失った。裁判につぐ裁判で、彼はかろうじて勝訴したものの、宏大な別荘と、十万フランに価するものといわれる貴重な蔵書売りはらわねばならなかった。彼は若いころから、ひたむきな愛書家であったから、数十年にわたって蒐集した最愛の書物が四散するのを見たことは、彼の傷心と絶望感を倍増したにちがいない。この不幸に加えて、卒中の発作があり、また痛風と結石の病が悪化したので、彼はまったく劇界から引退することを決意し、故郷ナンシーにこもって余生を送ることとなる。

晩年の彼は、「選集」<sup>65</sup>の編集を唯一の楽しみに日々を過した。すでに彼は十巻の作品集を出版していたが、<sup>66</sup>その中から気に入ったものを三十篇えらび、四巻にまとめた。最終巻が世に出た翌年、一八四四年七月二五日、ほとんど盲目のピクセクトールは七十一才で死んだ。

以上のとおり、彼の生涯は実に変化に富んだものであった。貴族の息子、兵士、恋人、逃亡者、書記、役人、画師、劇作家、名士と移りかわり、運命に翻弄されながら乱世を巧みに遊泳する姿は劇的であり、平穏と安定に縁のないその一生は、まことに数奇なものといわねばならない。彼こそ、実生活も創作も、メロDRAMを生きた男であった。王党派の父親から、亡命貴族の反革命に参加することを命じられた息子が、勇んで出陣したものの、いつのまにか革命政府に拾われ、公安委員会の軍事務局の書記になりすまし、反革命派撃滅の容赦ない命令書を作成していたことなど、まさしく一編のメロDRAMである。



ピクセレクトールの作品を分析するに先立って、彼の一生を通観したことは、創作に影響を及ぼす、あるいは及ぼさない、作家の実生活、という一般的命題に一例を加えることになるかもしれない。しかも、ピクセレクトールのような作風、すなわち架空的で、現実性にとぼしい筋書きを提出する作家が、執筆に当って、実生活に無関係なフィクションを空想したのか、あるいは生活体験を生かしたフィクションを構成したのか、という点は、作品の価値をはなれてかなり興味のある問題である。

ピクセレクトールの実生活を知ってからその作品に接すると、荒唐無稽、あるいは御都合主義を感じる度合は、知らない場合に比べて、より小さくなるであろう。これら安易な手法は大衆むきの作品におしなべて見られるものであるが、空想からのみの創作でない場合は、やはり、微妙な説得力があるのではなからうか。ピクセレクトールにおいて、話の筋は借り物または空想であるが、その雰囲気醸成と、事件が発生し拡大してゆく可能性は、彼自身の経験による素材で裏打ちされている。ここに彼のメロドラマ作家としての強味があった。しかも時代は革命直後であり、ひとびとは、〈どのような事件も起りうること〉を実感していた。当時の彼の作品が、満天下の観客をうなせたのは当然であろう。ここで、いよいよ、往年の大ヒット劇、そして現在では完全に忘れ去られたメロドラマ「セリーナ」を、具体的に紹介せねばならない。

〔この章おわり。以下次号。〕

註47

伝記に関する事実関係の資料は、主としてハートツグの著書「ギルベール・ド・ピクセレクトール」(前号既出)による。これは、ピクセレクトールの曾孫アンドレ・ヴィルリのモノグラフィ(André Virely: *Reni-Charles Guilbert de Pixérécourt*, chez Edouard Rahin, librairie de la Société des Bibliophiles français, 1909)より得た資料で、最も信頼できるものである。なお、ジニステイの著書「メロドラマ」(前号既出)にあるピクセレクトールの簡単な伝記は、部分的に委しくもあり、興味ぶかい記述であるが、ハートツグのものに比べて、細部に相異点がある。後者は明らかにジニステイのものを参照

しているうえ、信頼性に富むので、ここでは、シニステイの記述は適宜利用するとどめた。さらに、ピクセールの伝記に関する資料は、これら以前に、以下の人名事典が挙げられる。(頁目の見出しは Pixerecourt または Guibert)

① *Biographie universelle et portative des Contemporains* (Rabbe, Viehl de Boisjolin et Sainte-Preuve), 1834. 簡明であるが、誤りがあり、重要点が洩れている。しかし伝記として最初のもの。(Quérard: *La France littéraire* [1829] では作品リストのみ)

② *Nouvelle Biographie générale* (Hoefer), 1843. 右の①を再録し、さらに「メロドラマを軽視する文学的評価を加えたもの。作品リストに価値あり。

③ *Biographie universelle, ancienne et moderne, nouvelle édition* (Michaud), 1854. ①より委しく、若干の誤りを訂正してある一方、空想による誤りが加わっている。執筆者 A-Y (René Alby の変名) は「ピクセールの『選集』(前号註22)に付けられたノディエの序文から多くを得たうえ、それに創作を付け加えている。

④ *Grand Dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle*. (Larousse), 1874. ③の資料を得たもので、誤りも踏襲している。

48 *Souvenirs du jeune âge*, dans le *Théâtre choisi*, t. I, p. xxii.

49 Jules Janin: *Histoire de la Littérature dramatique*, t. IV. Paris, 1854. p. 308.

50 *Souvenirs du jeune âge*. p. xix.

51 Jules Janin: *Op. cit.*, p. 311.

52 *Souvenirs de la Révolution*, dans le *Théâtre choisi*, t. II.

53 彼は自分の署名を次々と時代に適合なせつ変えている。革命期には Guibert、統領政府期には Guibert Pixerecourt、第一帝政と王政復古期には Guibert de Pixerecourt、そして最後には G. de Pixerecourt とした。これは G をイニシアルだけにすることによって、Pixerecourt とは借り物の貴族名だという中傷に、巧みに抗弁したものらしい。

54 この作品は、一七九六年にナンシーで上演されているので、前号の註22の記述のうち、「…彼の作品で最初に上演されたのは…」とあるのを、「…最初にパリで上演されたのは…」と訂正した。

55 革命暦第二年芽月二十七日(一七九四年四月十七日)の政令。  
56 *Secrétaire-commis à la section de la guerre* か *Sous-chef de la première division de la section de la guerre* である。

57 九月三十日。相手の名は Marie-Jeanne-Françoise Quinette de la Hogue.

- 58 *Souvenirs du jeune âge*, p. xxii.
- 59 *Biographie universelle* (Michaud) (註47参照)では、次のように、ピクセレクールがクロチルドと結婚したことになっているが、これは完全な誤りであり、Albyの空想によるものと思われる。《...Mais un beau jour, le cœur plein de l'image d'une jeune fille qu'il aimait, il jeta son uniforme aux orties, revient bravement à Nancy, malgré les lois contre les émigrés, épousa sa fiancée et prit avec elle la route de Paris...》
- 60 Hartog: *Op. cit.*, p. 28.
- 61 パリだけで三百九十二回上演された「選集」(「前掲」巻頭のリストによる。このリストはピクセレクールの自筆メモ〔現存〕を用いたもの)。また当然国外でも受け入れられた。たとえば一八〇四年にハンブルグ、一八三六年にライプツヒヒでドイツ語訳が上演されている。(ハートツグ「前掲書」二三五頁)。
- 62 「選集」(「前掲」巻頭のリストによる。なお、前号に「...地方で千八十九回...」とあるのは(四五頁)「千九百八十九回」の誤植である。
- 63 そのうち三十八篇が彼ひとりの手になる作品で、残り二十一篇は合作者(Léger, Dubois, Antier, Brazier, Cornu, Mélesville, M<sup>me</sup> Marty, Laqueyrie, de Trégate, V. Ducange, Pigault-Lebrun [La Lettre de Cachet, 1831]の協力があつたものといわれる。合作することは彼の意志に反するものであったが、当時の習慣であつたらしく。しかし合作の結果はかんばしくなく、一八二六年以降の作品は、彼自身のものである例外をのぞいて(Tite de Mort [1827], Latude [1834])凡庸なものが多い。どこまで彼の手が加わっているかは、当時の原稿が残っていないので判定できないうが、おそらく意見を述べ、名前を貸したにとどまるのではなからうか。
- 64 ポール・ラクロワによると、ピクセレクールは、すでに少年時代、優等賞の書物を中心に、本を買い集め、二百冊の蔵書を誇っている。その選定には、愛書家としての本能が示されていた。その蔵書を、賭事のため一挙に失った彼は、再建を誓って、いっそう蒐書にいそしみ、二度と賭はしなかった。(Bibliophile français, t. II, 1868, [article de Paul Lacroix sur Guilbert de Pixérécourt])
- 65 註22参照。
- 66 *Théâtre de R.-C. Guilbert de Pixérécourt*, 10 vol. in-8°, éd. Barba, 1796-1838.